

小・中学校

平成 14 年 度

教育研究員研究報告書

へ き 地 教 育

東京都教職員研修センター

平成14年度

教育研究員（へき地教育）名簿

市町村名	学校名	氏名
青梅市	霞台小学校	○柴田正広
青梅市	新町小学校	門田和恵
日の出町	平井小学校	◎池田貴博
大島町	野増小学校	西村孝道
八丈町	三根小学校	佐藤之保
福生市	福生第二中学校	堀田幸司
檜原村	檜原中学校	山崎有里恵

◎世話人

○副世話人

〈担当〉東京都教職員研修センター 指導主事 光山真人

目 次

I 研究主題設定の理由	2
1 地域・学校の特性	
2 児童・生徒の実態	
3 へき地教育の課題	
II 研究の内容と方法	3
1 本研究における「社会性」の考え方	
2 研究の仮説	
3 検証方法	
4 各検証授業の位置づけ	
III 研究構想	5
IV 調査研究	6
V 検証事例	8
1 「生活上の問題解決の方法として、表現活動を効果的に取り入れる指導」	8
小学校第5学年 特別活動	
2 「問題を作りあうことにより、表現を工夫させる指導」	12
中学校第2学年 数学科	
3 「絵本の読み聞かせを通して相手に応じた接し方を工夫する指導」	16
小学校第6学年 国語科	
4 「実験を踏まえての意見交流の指導」	20
小学校第4学年 理科	
VI 研究の成果と今後の課題	24

研究主題

社会性の基礎となる表現力を高める指導法に関する研究

1 研究主題設定の理由

増加する不登校児童・生徒、依然続いているいじめ問題や校内暴力の問題など、現在の学校には様々な問題が山積している。これらの問題の原因の一つとして、子どもたちに適切に「社会性」が育成されていないということが考えられる。この解決には、家庭と学校との連携が重要であり、学校の積極的な対応が期待されている。

学習指導要領が改訂されたねらいの一つに、『完全学校週5日制の下、ゆとりの中で子どもたちに「生きる力」を育成すること』がある。これが、中央教育審議会の答申でも示された。人間は生来「相互に言葉により表現し合い、お互いの考えを理解し合いたい」という「社会性」をもっていると考えられる。このことは言葉によるコミュニケーションにより「他とかかわりたい」と願う欲求を上手に満たしていくことである。現在学校において山積している問題の多くは、この欲求がうまく満たされていないことが原因の一つだと考えられる。「生きる力」の育成のためには、子どもたちの「社会性」を積極的に発揮させること、その基礎となる表現力を高めていく必要がある。中でも、最近の子どもを取り巻く問題の多くに、“言葉による表現の未熟さ”が原因となっている場合が多くあることを考えると、今後学校教育で取り組んでいくべき表現方法の中で特に重要なものとして“言葉による表現”が考えられる。

本研究は、これらの社会的背景をもとに、各学校の子どもたちの「言葉による表現」についての実態をKJ法による考察を行った結果、子どもたちの社会性を育成するためには「言葉による表現力」を高める指導を系統的かつ計画的に行っていかなければならないと考えた。そこで、その指導内容や方法を探り、その充実を図るために、本研究主題を設定した。

1 地域・学校の特性

西部山間及び島しょ地域では、豊かな自然に恵まれ、住民の移動も少なく比較的固定化された人間関係が多く残っている。しかし、近年高度情報化社会の影響や大人とりわけ保護者の就業実態が変化したことにより、以前のような地域における密接な人間関係や伝統文化へのかかわりは少しずつ薄くなってきている現状がある。

- 子どもも、子どもを取り巻く大人社会でも、固定化された人間関係の中で互いに遠慮しあって「言葉」で明確に表現しない場合がある。
- 自分の考えを「言葉」で明確に表現するよりも、知り合い同士の中で「察し合う」ことで関係が成り立っているため、人間関係の調整の必要性が少ない。
- 学校での教育活動の中で表現力を育成するための計画的・組織的な実践が少ない。

2 児童・生徒の実態

児童・生徒の実態は、西部山間地域や島しょでも学校によってそれぞれが異なるため、ここでは研究員7名が所属する学校の児童・生徒の傾向を述べることとする。

今年度の研究員の所属する学校はそれぞれ規模が様々なため、今までの「へき地の学校＝

小規模の学校」という構図は当てはまらない。しかし、小規模の学校では、固定的な人間関係によって、学習を進めていく上で表現力や人どのかかわりに課題のあることが挙げられるのと同じく、大規模の学校でも、自分の考えや意見をうまく言えずに周囲に埋没してしまうことが課題とされる。

- あいさつなど子ども同士の日常会話は積極的に行われているが、公的な場や大勢の前で自分の言葉を使って話す場面では話そうとする意欲が大きく低下する。
- 相手に対して言いたいことがあっても、固定化した人間関係の中で、言いたくても言わないことがある。

3 へき地教育の課題

平成13年度教育研究員「へき地教育」部会では、「郷土に目を向けた指導内容や指導方法の開発及びそのための指導の手だて」を探った。その際、今後の残された課題が3点挙げられているが、本研究部会では、「豊かな人間関係を生かした指導の工夫」に着目し、お互いに認め合い、自己表現し合える社会性の育成が重要と考えた。

以上のような実態や課題から、本研究では児童・生徒が社会の変化に主体的に対応して生きていく力をはぐくむため、それぞれの実態に合わせた言語による表現活動を意図的に授業の中に取り入れ、人間関係の基礎を培い、社会性を育てる指導のあり方を探ることを研究のねらいとした。

そのため、研究主題を「社会性の基礎となる表現力を高める指導法に関する研究」とし、仮説を立て、授業実践を通して検証していくことにした。

II 研究の内容と方法

まず、子ども達の実態と家庭・地域の実態を把握するために、先行研究の分析や調査研究（子ども達へのアンケート）を行った。その結果を踏まえて、研究主題を設定した。次に研究仮説を立て、研究仮説を具現化するための指導法について共通理解を図った。さらに、研究仮説の検証のために、各教科・領域等の検証授業によりどのような指導法が有効かをさぐることにした。

1 本研究における「社会性」の考え方

研究を進めていくに上で、「社会性」を次のように共通理解し、研究のキーワードとした。

子どもたちが相互に言葉により表現し合うことにより、お互いの考えを理解し合うこと。

2 研究の仮説

研究を進めていくにあたって次の研究仮説を立て、研究を深めることとした。

相手意識をもった言語活動を工夫して行うことにより、社会性の基礎となる表現力を高めることができるであろう。

「相手意識」とは、音声言語による表現活動をグループの中でしていく際に、「相手の様子を見ながら話し方を工夫したり、話し手が何を伝えたいのかを考えながら聞いたりする」ことを意図している。「相手意識」をもって相手のよさを見つけ、肯定的に受け止めたり、新しい一面を発見したりしていくことにより、社会性を育成していくための基礎となる力が高まっていくと考えた。

3 検証方法

教育研究員それぞれの所属校は校種が異なるうえ、児童・生徒の実態、地域の特性も異なっている。また、教科・領域等によっても指導のねらい等が異なっていることを踏まえ、本研究では次のように授業のねらいを絞って考察していくことで研究仮説を検証していくことにした。

検証授業において、子どもたちがグループでの音声言語による表現活動をする際のチェックポイント

- 相手の言葉を、肯定的に受け止め、よさを見つけたか。
- 表現の工夫・表現のわかりやすさがあったか。
- 子ども同士のやりとり・コミュニケーションがみられたか。

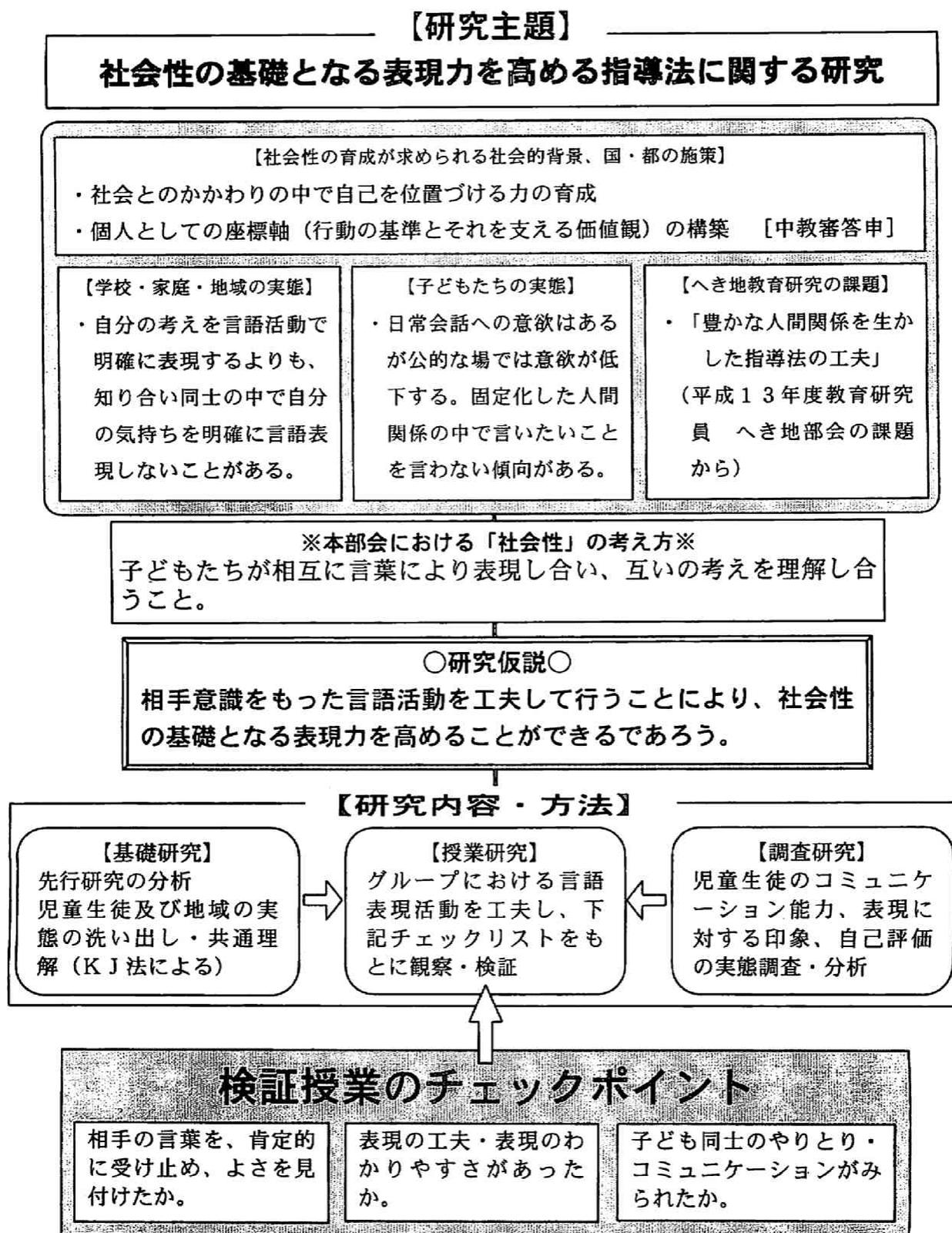
全ての検証授業を実施していくにあたって、授業・活動の中に「相手意識をもって音声言語による表現活動をしていく」ということを共通に実施していった。

4 各検証授業の位置づけ

	検証事例（実践順）	学習活動の内容
1	「お話フリーマーケットをしよう」 （小学校第6学年 国語）	絵本を保育園児に読み聞かせするための話し合い活動
2	「劇のある教室をつくろう」 （小学校第5学年 総合的な学習の時間）	グループごとに劇を考えるための話し合い活動
3	「連立方程式の問題をつくり合おう」 （中学校第2学年 数学）	自分でつくった文章問題をグループで説明し合う活動
4	「空気でっぼうの秘密を発表しよう」 （小学校第4学年 理科）	実験に向けてのグループでの話し合い活動
5	「クラス相談会を開こう」 （小学校第5学年 学級活動）	話し合いで問題解決を図るための基礎的学習
6	「日本を形づくる都道府県の姿をとらえよう」 （中学校第2学年 社会）	地図を完成させるグループでの話し合い活動
7	「相手の気持ちや立場を考えよう」 （小学校第4学年 学級活動）	相手のことを考えた自己表現のスキル学習

III 研究構想

次の研究構想図は、前述の「研究主題設定の理由」及び「研究の内容と方法」について構造化したものである。



IV 調査研究

1 調査目的

西部山間及び島しょ地域の児童・生徒の「コミュニケーション能力」「自己評価」「表現」に対してもっている印象について調査を実施することで、児童・生徒の実態を捉え、研究の方向性を明確にし、授業研究での指導に生かす。

2 調査対象

【小学校】西部山間地域3校、島しょ2校 3～6年生 計155人

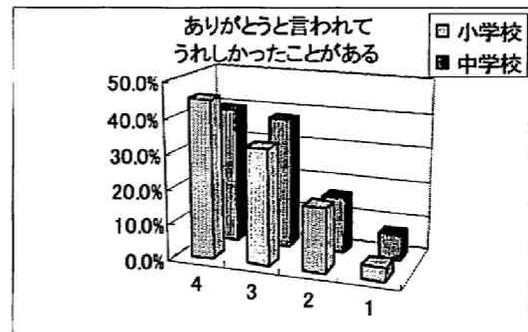
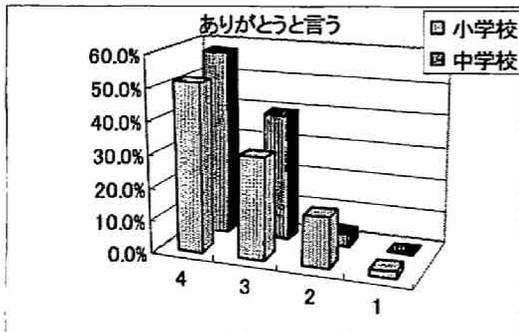
【中学校】西部山間地域2校 2年生 計56人

3 実施時期 平成14年7月

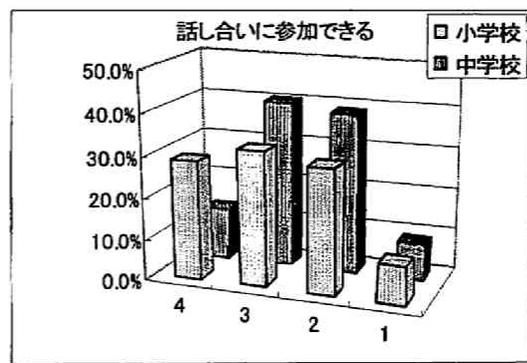
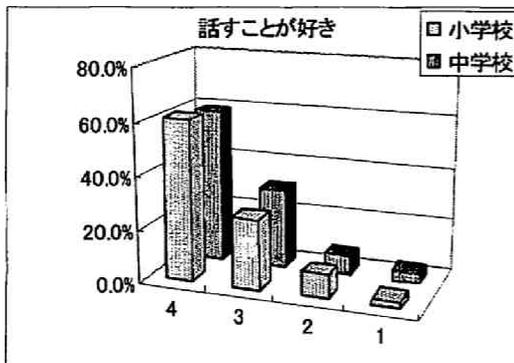
4 調査結果と考察

回答は選択式 4とてもそう思う 3まあまあそう思う
2あまりそう思わない 1ぜんぜんそう思わない

コミュニケーション能力



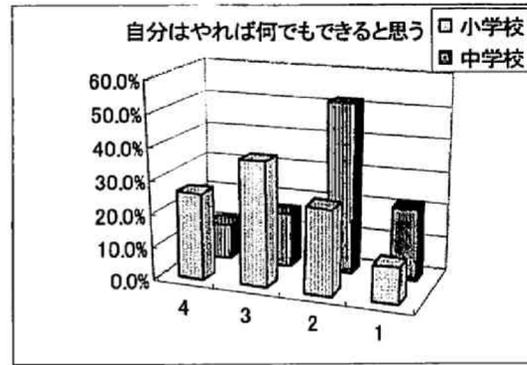
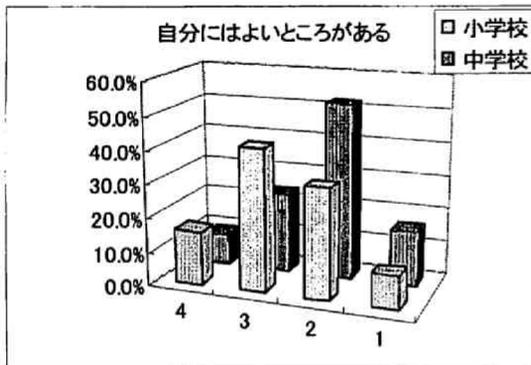
【結果】 「ありがとう」と言う経験を多くもっているのと同様に、「ありがとう」と言われてうれしかった経験を多くの児童・生徒がもっている。



【結果】 話をするのが好きという項目ではプラス評価が多いが、話し合いに参加できるという項目ではマイナス評価が目立っている。

【考察】 「ありがとうと言う」「話すことが好き」から、表現する意欲は高いと考えられるが、公的な場での話し合いでの表現には苦手意識をもっていることが考えられる。これは、改めて話し合いをすることへの対応がうまくできない児童・生徒が多いことを示している。このことから、より豊かな表現力を身に付けていくためには実態に合った規模の集団を設定していく工夫が必要になってくると考えられる。そのためにはどのような集団の設定が適切なのかを十分検討する必要がある。

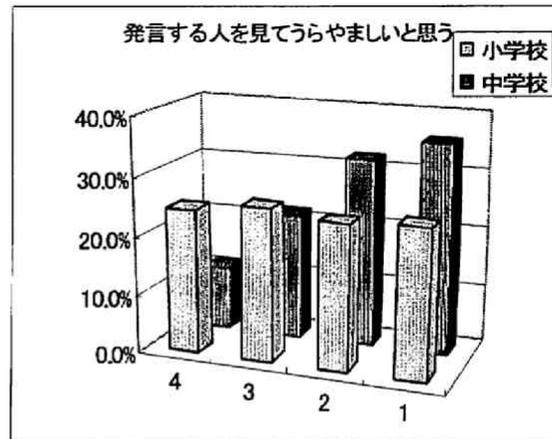
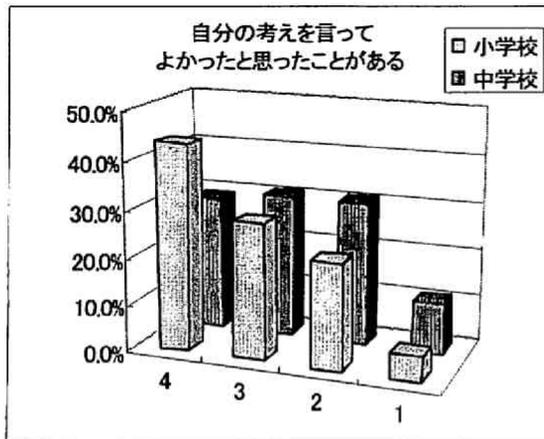
自己肯定感



【結果】 小学校に比べて中学校の自己肯定感の厳しさが目につく。どちらの設問も、中学生は50%以上が自分をマイナス評価している。

【考察】 中学生になるにしたがい自分のことがよくわかるようになってくるといふ面もあると考えられるが、周囲の目や自分に対する評価への心配から肯定的な自己評価をもちにくくなっていると考えられる。肯定的な自己評価をもてるようにすることが、自己表現への意欲へつながり、自己表現をしようとする行動へとつながっていくのではないか。そのためには、どうすればより自己肯定感が身に付くのか検討していく必要がある。

表現に対してもっている印象



【結果】 発言する人を見てうらやましいとはあまり思わないが、自分の考えを言って、よかったなあと感じたことは比較的多い。

【考察】 自分の発言ほどは相手の発言を意識していない様子を感じ取れる。相手の発言を肯定的に受け止める力をお互いに高めていければ、より自分の考えを表現しようとする意欲が高まるのではないか。そのためには相手の気持ちや立場を考え合うという学習を学校教育全体で設定していくことを検討していく必要がある。

V 検証事例

検証事例 1	「生活上の問題解決の方法として、表現活動を効果的に取り入れる指導」	9月～12月実施 小学校第5学年 特別活動
-----------	-----------------------------------	--------------------------

1 活動名 「クラス相談会を開こう」

2 活動の目標

- (1) 生活での課題を解決する効果的な方法として、集団で話し合うことよさに気づき、自己肯定感や仲間意識を強め、表現する意欲を高める。
- (2) 人間関係における、言葉を使った効果的な表現の技能を知り、それを使うことができる。

3 活動設定の理由

社会の中で人々が適切に表現し合うためには、「自己を表現したい」という意欲と「相手の気持ちを考え合う上に成り立った効果的な表現技能」を身に付けることが不可欠である。しかしながらクラスの実態を見ると、相手の気持ちや立場等を考えずに自分の気持ちを表現し、自分の要求を実現しようとする傾向が強い。また、生活上の問題解決については、教師にその解決を依存する傾向が強い。一方で教師の指導に対してはまだまだ素直に聞き入れる姿勢もあるので、この時期を機に、自分たちで、協力し、話し合うことによって問題を解決するクラス相談会を開き、自己肯定感や仲間意識を強め、積極的に表現することの重要性に気付かせようと考えた。そして、そのクラス相談会を積み重ね高めることで、「表現力を高める」ことになり、それにより研究主題の「社会性の育成の基礎」の学習となると考えた。

4 児童の実態

友人関係としては、多くの友人を作る努力をせずに、少人数で固まろうとする傾向が強い。「別に仲良くならなくてもよい。」という言葉もよく耳にする。そして、グループ内は大切にすが、グループ外に対しては乱暴という様に、グループの内外で、態度や言葉づかいを使い分けている児童がいる。その結果、自分で交友範囲を限定しているため、摩擦が起きた時の逃げ場が少ないと予想できる。このことから、相手に自分の本音の要求をすることも少ない。また、「ありがとう」「ごめんなさい」などの感謝や謝罪の意味の言語を適切に使うことも少ない。しかし、嫌な思いをしただけ、友人とうまく付き合いたい、悪口はいけない、友達をいじめてはいけない、という意識は高く、自分が大事にされたい、友達を大事にしたい、という意見が全体の前でも発言されることが多く、相手の気持ちを互いに尊重し考え合いたいという気持ちは高いと考えられる。

児童の言動は、①自分の感情をコントロールする②他人を信頼し、協力的に話し合う、という点では、全体的に幼い傾向があり、技術も未だ不十分な点が多い。

5 活動の評価規準

- (1) 自分や相手の気持ちを素直に認め、その気持ちを言語化できる。
- (2) 適切な方法で言語表現し、自分や相手を尊重した解決方法を提案できる。

6 指導の実際 (学期計画)

	○主な学習活動	★指導の手だて
9月 下旬	<p>クラス相談会の目的や方法を理解する。</p> <p>○基本方針を確認する。</p> <p>「クラス相談会はみんなの気持ちを大切に、問題を解決する場である。」</p> <p>「私たちは、全員が高め合い、助け合うためにここにいる。」</p>	<p>★話し合いの基礎には、常に相手の気持ちを考え合うという理念があることを忘れないようにする。</p> <p>★教師からの指示は、できるだけ命令調や説教調にならないようにする。</p>
10月	<p>「みんなが勝つ方法を探す。」</p> <p>「教室はお互いを尊重する場である。」</p> <p>他</p> <p>○クラス相談会の運営方法を理解する。</p> <p>解決策の見つけ方 発言の仕方</p>	<p>★相手の気持ちを考え合うという理念に反する言動に対しては、必要に応じ、子どもに問いかけていく。</p>
	<p>定期的にクラス相談会を開く。</p> <p>>>>>本時 (第3回目)</p>	<p>★相手の気持ちを考え合うことについては、教師も子どもを尊重する態度を心がけ、努力する。</p>
11月	<p>月目標</p> <p>10月 先生と一緒に、失敗を恐れずに、生かしながら、適切なクラス相談会をつくり上げていく。</p> <p>11月 先生に頼らないで、適切なクラス相談会を運営できるようにしていく。</p>	<p>★教師が認めることのできない選択肢は、解決策の中に入れられないことを、あらかじめ子どもたちと合意しておく。</p> <p>★子どもの表現に不適切なものを感じたら、教師がその印象を素直に伝え、必要に応じ、中断し、次に進む。(協力的に)</p>
12月	<p>12月 自分たちが中心になりクラス相談会を運営していく。</p>	<p>★話し合いは、児童の実態に合わせ、集中できる時間で、区切るようにする。</p> <p>★児童から出てくる解決策の中には、罰則的な解決策が出る可能性があるもので、必要に応じ、問いかけていく。</p>

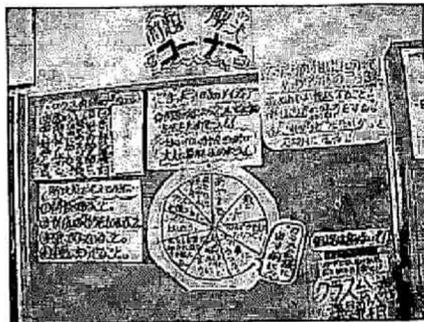
7 本時の展開 (45分)

(1) 本時の目標

教師の支援を受けながら、自分や相手の気持ちを素直に認め、その気持ちを言語化し、自分なりの解決方法を提案できる。

(2) 本時の展開

学習活動	教師の支援	評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・ 導入ゲーム (2人1組による) ・ 相手の考えを互いに推測しあうゲーム など ・ 前回の解決策について検討する。 ・ 議事 <ol style="list-style-type: none"> 1. 相手の話を聞き、相手の気持ちや立場等を理解し合う。 2. 自由に議論する。 3. 問題解決策を提案する。 ・ これからの学校生活を互いに楽しく過ごしていくために何をしていけばよいのかについて話し合う。 	<p>児童が短いゲームを行うことにより、リラックスして、「言葉」による表現がしやすい雰囲気をつくる。</p> <p>全活動において、「互いに相手の気持ちを考え合う」立場から、常に児童を観察し、必要に応じ助言する。</p> <p>児童が相手の気持ちを考え合うことができないと判断した場合は、中断し、次のことに移る。</p> <p>ただ、児童が気付くように、助言を児童に応じて適時行っているとき、児童自身に意識化させるとともに、まわりの児童にも気付かせていくようにする。</p> <p>議題によっては、言葉と同時に、ロールプレイ等をして、心で感じるができるように工夫する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○児童が自分で納得して、適切な解決方法を選んでいるか。 ○児童が相手の気持ちを認め考え合うことができたか。 ○児童が会議の中で、自分の気持ちを適切に言語化することができたか。 ○児童が自分の気持ちを言語化する際、相手に分かりやすいように表現を工夫することが出来たか。 ○児童相互のコミュニケーションが活発になされていたか。



8 成果と課題

(1) 相手の言葉を肯定的に受けとめ、よさを見つけたか。

- 導入ゲームを行うことにより、肯定的な雰囲気での話し合いが進行できた。
- 議題に出された友達の悩みについて、自分なりに考え、提案できた子どもは、出された案の適切不適切を問わず、提案者の悩みを肯定的に受けとめていたと考察できる。また、積極的に質問をしていた子どもたちにも、相手のことを肯定的に受け止めようとしていたといえると考えられる。
- 全体的に、話し合いが攻撃的ではなかったと感じられた。このことは、言葉を通じた話し合い活動が、概ね肯定的な感情のもとに行われたためと考察できる。

(2) 表現の工夫・表現の分かりやすさがあったか。

- 友達の理解しにくい表現を、別の子どもが言い直す場面があった。
- 話し合いのテンポを優先するため、教師の言い換えが多くなってしまったのは、課題として残る。
- 自分の提案や質問、解決策を、全員が見えるように工夫して黒板に掲示して示したことで、互いの考えを理解することが出来た。

(3) 子ども同士のやりとり、コミュニケーションがあったか。

- 本時の言葉によるコミュニケーションのパターンは、「悩みの提案」「悩みへの質問」「解決策の提案」「提案への質問」などであり、解決策の提案では、不適切なものを含めて、本人なりの自己表現があり、コミュニケーションが深まったと考察できる。
- 話し合いのテンポを優先したため、児童相互のコミュニケーションができなかった。しかし、今後回数を重ねるうちに、解決できると考えられる。
- 教師を介さないで児童相互によるコミュニケーションが見られた場面もあった。

<課題>

- 評価規準については、活動の性質上から抽象的なものが多くなり、その評価は、児童の感覚に頼る場合が多いので、多くの児童から情報を集めないと、評価が指導者の主観的なものになってしまう傾向がある。
- 話し合いのテンポは、参加者の多くに心地よさを体験させるためにも重視する。そのため、クラス全体で行っている場合、全員の意見を取り上げる時間を保障できない場合がある。
- 児童の不適切な言動に対し、教師の説教ではなく、その児童自身が気が付くように助言していく技術の難しさが課題である。

検証事例 2	「問題をつくりあうことにより、表現を工夫 させる指導」	7月～9月実施 中学校第2学年 数学科
-----------	--------------------------------	------------------------

1 単元名 「連立方程式の問題をつくり合おう（連立方程式の利用）」

2 単元の目標

- (1) 自分の意見を伝え合い、仲間と相談をしていくなかでよりよい表現を工夫していこうという気持ちをもつ。
- (2) 日常生活や事象を数学的な見方でとらえ、解決していくことで、数学の有用性を感じる。
- (3) 自分で問題をつくることにより、数学的な考察力（①日常の事象から条件を読みとる力、②その条件を数学的な見方でとらえ、式として表現する力、③式を処理し、解決する力）を育てる。

3 単元設定の理由

学級で、作文を書くときや自分の意見を発表するときに、「自分を表現していくこと」を苦手としている生徒が多い実態がある。そこで、あらゆる場面で「表現をする場」を設定していくことで、表現をすることの楽しさを知り、自分に自信をもち、さらにはその表現を肯定的に受け止め、相手を理解するといった経験を数多く積んでいくことができ、そこから「社会性の基礎となる表現力」が養われていくのではないかと考えた。

そこで今回は、以下の3点を意図して実践を行った。

① 数学の授業における表現をする場の工夫

毎日の生活の場面から数学的な内容を見だし、自ら問題をつくっていくことで、自分の考えを発表する場を用意する。

② 生徒同士が意見を交換し合える活動の工夫

グループによる活動を多く取り入れることにより、意見のやりとりを活発にし、そのなかからお互いの意見の中よさを認め合うようにする。

③ 主体的に問題を解決しようとする活動の工夫

自分たちでつくった問題をお互いに解き合うことで、少しでも興味をもち、苦手意識を減らし、意欲的に問題を解くという姿勢を養うようにする。

4 生徒の実態

指導学級は合計22名の少人数の学級であり、幼少から小学校の頃よりほぼ同じ人員構成で生活してきている。全体的に穏やかな性格の生徒が多く、クラスの雰囲気も、とても和やかである。

その反面、今までの慣れからか、相手を傷付けることを平気で言ったりする面も見られる。また新しいことにチャレンジしようとする意欲のある生徒が固定化しており、いつも決まったメンバーが意見を言うことが多く、自分の意見を明確に言わないで過ごしている生徒たちもいる。授業の中で自分の意見を述べることについても、教師の発問に対して自分の答えを述べる時だけと考えている傾向があり、積極的に自分の考えを全員に伝えようという意欲は見られない。

学区が広い割には、生徒数は全校で77名と少なく、これからも減少の傾向にある。そのため、生徒たちは幼少期のころより同じ保育園、幼稚園、小学校、中学校と固定化された人間関係の中で過ごしていくことになっている。そのため、互いに自分の考えを明確に言葉で表現しあわなくてもよい雰囲気ができてしまっている。

また、地域の中でも豊かな自然の中で、住民の移動も少なく、行き交う人同士も顔見知りであることが多い。古くからの地域の伝統行事へ参加することなども多く、生徒たちは地域の人たちと交流する機会が多い。そこでも地域の人たちと生徒たちは、幼少のころからの顔見知り同士という人間関係から積極的に自分の考えを明確に表現しないでよい雰囲気ができてしまっている。

5 指導の実際（8時間扱い）

時数	○主な学習活動	★指導の手だて ◇評価
4	<p>○連立方程式を使っていろいろな実際的な問題を解決するための考え方とその手順を理解する。</p> <p>○いろいろな問題例を通して、その式を立てる。</p> <p>○つくった連立方程式を解き、解を吟味する。</p> 	<p>★一元一次方程式と二元一次方程式の立式での相違点と類似点とを引き出し、理解させていく。</p> <p>★問題文の中から立式の鍵となる文章を見つけることができるよう助言する。</p> <p>★問題で要求されている答えとなっているか注意する。</p> <p>◇与えられた文章題に対して、2つの方程式をつくるために文章をよく吟味することができたか。</p> <p>◇連立方程式を使って文章題を解くことができたか。</p>
	<p>○毎日の生活の場面から、数学的な内容を見だし問題をつくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・方程式($x+y=15$)という条件に合う問題を作成する。 ・教師からの条件設定なしで問題作成する。 	<p>★まずは、1つの方程式($x+y=15$)を与える。つくりにくい生徒にはヒントを与える。</p> <p>★条件なしで、問題をつくるように指導する。その際、求めるものから考えていく方が、問題がつくりやすくなることを助言する。</p> <p>◇数学の問題をつくることを通して、</p>

		<p>表現する力が育成できたか。</p> <p>◇物事を順序立て考えることができたか。</p>
<p>【夏期休業中】</p>	<p>○みんなが解きたくなるような問題をつくってくる。</p>	<p>★最終的には、解くことができない問題になってもかまわないことを伝える。</p>
<p>2</p>	<p>○ワークシートの日記文を読み、未知の数量を発表する。</p> <p>○生徒相互の情報交換を行う。</p> <p>○未知の数量を求めるために式を作る。</p> <p>○自分の作ってきた問題を検討する。</p> <p>○班ごとにそれぞれが作ってきた問題を発表し合い、検討する。</p> <p>○班の代表となる問題を選ぶ。</p> <p>○一班ずつ代表の問題を選んだ理由とともに発表し、全員で問題を解き合う。</p> <p>○選ばれた問題は、本当に解きたくなったか、改善すべき点はなかったかなど感想を話し合い、活動のまとめとする。</p>	<p>★他の意見も聞くことにより、求めることのできる数量がたくさんあることに気付かせ、意欲を高める。</p> <p>★日記文の中には条件が2つあっても、実は1つしかないのと同じであることに気付かせる。</p> <p>★自分たちが作ってきた問題をみていくときも、条件が整っていないかも知れないことを考えさせる。</p> <p>★基本的には、「解きたくなった問題」を選ぶように伝える。また、なぜその問題は解いてみたいのかという理由についても一人ひとりが自分の考えを述べるようにする。</p> <p>★問題を読むときは、聞き手のことを考えて読むようにさせる。立式や方程式を解くことにとまどっている生徒には個別に指導する。</p> <p>★解いてはみたいが、解くための条件がそろっていないといったことも、話し合わせる。</p> <p>★連立方程式やその解の意味を再確認させる。</p> <p>◇自分の意見を相手にわかりやすく工夫して伝えることができたか。</p> <p>◇仲間の意見の中に、よさを見つけることができたか。</p> <p>◇グループ内で意見のやりとりをすることができたか。</p> <p>◇発表者・聞き手双方の身体表現の工夫はあったか。</p>



6 成果と課題

(1) 相手の言葉を肯定的に受けとめ、よさを見つけたか。

お互いの問題を発表し合った後、より解きたくなるような問題にするためには、どうすれば良いかをグループごとに話し合った。物の値段を問う問題が多く見られたが、その中でやたら高価な値段を付けてみたり、現実にはあてはまらない答えになったりする問題があった。「それは高すぎるんじゃない。」「そんなこと現実にはありえないよ。」といった仲間の意見を聞くことにより、自分自身では見落としていた部分を再度見つめ直し、より解いてみたくなる問題を作ろうとする姿を見ることができた。

(2) 表現の工夫・表現の分かりやすさがあったか。

作ってきた問題は、プリントにはせず口頭で発表させた。したがって、普段と変わらないペースで問題を読んでいけば、当然周りの人は聞き取ることができず、問題を解けなくなってしまふ。一度目は、何の工夫もなく普通に読んでいた生徒が、友達が聞き取ることができなかつたと分かると、次はゆっくりと読みさらにポイントとなる部分は大きな声で読んであげるといった工夫を自然と行えるようになった。



(3) 子ども同士のやりとり、コミュニケーションがあったか。

本実践では自分の考えを述べる場として、6名～7名で構成される班での活動を取り入れた。普段の生活班のままでの活動だったので、意見が活発に出てくる班とそうでない班とが両極端に分かれてしまった。最終的には、どんなグループ内でも自己表現ができるようになることが目標ではあるが、今の段階では、各グループで意見を活発に述べられる生徒が他の生徒をリードしていくことが必要である。また、一人ひとりがより多くの意見を述べるためには、2名～3名といったさらに少人数でのグループ活動を取り入れていくことも大事である。

<課題>

生徒に数学の授業を通して社会性の基礎となる表現力を育成していくためには、授業の中で繰り返し生徒が自分の考えを相手にわかりやすいように表現していく機会と場を意図的に設定していく必要がある。相手の様子を見ながら話し方を工夫したり、話し相手が何を伝えたいのかを考えながら聞いたりすることを確実に身に付けるためには、数多くの場を踏んでいくことが大切である。今回の授業を通して、相手意識をもち、表現活動を行うことが身に付き始めてきてはいるが、これからも、さらにいろいろな場面で表現をする機会と場を意図的に用意していかなければならないと感じた。

検証事例 3	「絵本の読み聞かせを通して相手に応じた 接し方を工夫する指導」	6月～7月実施 小学校第6学年 国語科
-----------	------------------------------------	------------------------

1 単元名 「お話フリーマーケットをしよう」

2 単元の目標

絵本の読み聞かせを行い、語り合う活動を通して、自分の考えや気持ちを的確に話したり、相手に応じた接し方をしたりすることができる。

3 単元設定の理由

本校が力を入れて取り組んでいるものが二つある。一つは読書力を高めること。もう一つは、「認め合い」「かかわり合い」を重視して、異年齢集団の交流を図ること。これは、縦のつながりを深め、社会性や思いやる心を育てるためである。そこで、これらの二つを生かしながら研究主題に迫りたいと考えた。

ここでは、絵本を用いることにした。絵本を題材に語り合う活動を行い、自分の思いを相手に伝える力、相手に応じた接し方ができる児童を育てたいと考えた。

【本実践における指導の手だて】

① 絵本選び

1年生や保育園児、また、自分の力に合った絵本選びができるようにする。

② 読み聞かせ

話の順序、視線、読む速さ、本の見せ方、間の取り方などを観点として気付いたことを発表し合い、次の練習に臨めるようにする。

③ 相手意識

1年生と保育園児とでは読み聞かせの仕方に違いのあることに気付かせる。そこで、相手のことを考えながら、読み聞かせ・語り合いを楽しむためにはどうしたらよいか、課題をもって取り組めるように工夫する。

4 児童の実態

指導学級は合計33名の学級である。児童の中には、学習面・生活面においてリーダーシップをとっている者もいるが、控えめな者も多い。6年生としては幼い面もあるが、児童は素直で伸び伸びと生活している。集中力があり、発言も活発である。反面、個人差が激しく、個別指導が必要な児童もいる。

朝の読書を5年生の時からやってきたおかげで、本好きな児童が増えてきた。しかし、

「家庭で本を読む時間が15分以内」と答えた児童が半数以上もいる。「小さい頃、絵本をよく読んだ」という児童はかなり多い。

語り合いの活動をする場合、小説や伝記などより絵本の方が内容の理解が比較的楽であり、児童への負担も少ないと考えられる。

また、本校では、縦割り班での遊びや掃除が活発に行われているため、異学年との交流が多い。6年生として班をまとめていくためにも班員の気持ちを考えたり、学年に応じた接し方が出来ていかなければならない。

本実践を通して少しでも相手意識をもって縦割り班活動に取り組み、楽しく下学年とかわっていきけるようになることを願っている。

また、地域においては近年、住宅も多くなってきており、学区の中でも、団地や新しくできた住宅地などが増えてきて、児童数も増加してきている。そのため、本校の児童は固定化された小規模な人間関係の中で過ごしているというわけではない。しかし児童は積極的に多くの人たちに自分の考えを表現するよりも、学級の固定化された人間関係の中で過ごし、明確に自分の考えを表現しないですませている傾向がある。

5 指導の実際（8時間扱い）

	○主な学習活動	★指導の手だて ◇評価
1	○1年生に読み聞かせを行うために、自分の好きな絵本を選ぶ。	★適切な絵本選びができて一人一人を確認する。 ◇自分に合った絵本選びができたか。
3	○「お話フリーマーケット」の準備をする。 ・ポスターづくり ・読み聞かせの練習	★一年生が見てどんなお話が分かるように表現の仕方を工夫させる。 ★話の順序、読む速さ、本の見せ方、間の取り方などを工夫させる。 ★顔を上げたり、視線を向けたりして、聞き手を意識させる。 ◇表現の仕方に工夫が見られたか。 ◇自分の話し方や聞き方の問題点を見つけ改善していくことができたか。



<p>1</p>	<p>○1年生と「お話フリーマーケット」を行い、1年生と語り合う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;">「お話フリーマーケット」の流れ</p> <p>(1) アピールタイム ・聞き手を集めるために、自分の本のよさや選んだ理由を語り、聞き手に興味をもたせる。</p> <p>(2) 読み聞かせ</p> <p>(3) 語り合いの時間 ・感想や意見の交流を行う</p> </div>	<p>★語りが一方通行にならないように、読み聞かせ後の語り方などを工夫させる。</p> <p>◇1年生とのコミュニケーションがうまく図れたか。</p>  <p>◇1年生の話を上手に受け止めることができたか。</p>
<p>1</p>	<p>○1年生と「お話フリーマーケット」を振り返り、次回の保育園児への対応を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生と語り合っただけの感想を聞く。 ・語りの場面を振り返り（ビデオ）、語りを楽しむための工夫を考える。 ・保育園児への対応を考える。 ・保育士からのアドバイス（手紙）を読む。 ・次回への課題をたてる。 ・友達を相手に練習をする。 ・保育園児からのビデオレターを見る。 	<p>★保育園児のことを考え、語り合いを楽しむためにはどうすべきか、励ましながら考えさせる。</p> <p>◇保育園児に応じた接し方について考えることができたか。</p> <p>◇保育士のアドバイスを生かして練習に取り組めたか。</p>
<p>1</p>	<p>○保育園児と「お話フリーマーケット」を行い、保育園児と語り合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育園へ訪問 	<p>★園児が楽しく聞けるように場の設定に気を付ける。</p> <p>★前時の学習を生かして読み聞かせが行えるように工夫させる。</p> <p>◇保育園児に分かりやすい表現の工夫があったか。</p>

1	<p>○感想を発表し合う。語り合いを楽しむ方法をまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「年齢によって話し方を変える」 ・「相手の意見に共感する」 ・「表現の仕方を工夫する」 ・「笑顔を絶やさない」 ・「目を見て語り合う」 など 	<p>★自分の気持ちを素直に表現できるように言葉がけをする。</p> <p>◇語り合いを楽しむ方法を考え、まとめることができたか。</p>
---	---	---

6 成果と課題

〈成果〉

(1) 相手の言葉を肯定的に受けとめ、よさを見つけたか。

読み聞かせの練習をした後、児童相互で「もう少しゆっくりの方が保育園児にはいいんじゃない」「途中で語りを入れた方がもっと良くなるよ」「表紙の見せ方や裏表紙の見せ方が上手だったよ」等、お互いにアドバイスをし合っていた。又、保育士のアドバイスをさっそく練習に取り入れる児童たちがいた。このことは最終目標（保育園児との読み聞かせ）が明確になっていることで児童たちは相手の言葉を真剣に受け止め、相手のよさを見つけようとしていたと考えられる。

(2) 表現の工夫・表現の分かりやすさがあったか。

1年生と保育園児との読み聞かせには明らかに表現の工夫の違いが見られた。まず、難しいと思われる言葉は簡単に直して読み聞かせをした。また、顔の表情や声、手振りなどの動作を大げさにしていった。相手を意識した読み聞かせや語りが出来たと考えられる。児童たちは一人一人の性格が良くでていて、一つとして同じ表現の仕方がなく、それぞれが工夫した読み聞かせが出来ていた。

(3) 児童同士のやりとり、コミュニケーションがあったか。

「お話フリーマーケット」で全員が5人以上の1年生とかかわり合った。その時のビデオ（2人の見本）を全員で観て、意見の交流を図った。よい点も改善すべき点も素直に意見を出し合い、クラス全体の課題にしていこうとしていた。

ここでは全体で話し合いを行ったが、相手を意識したコミュニケーションを図っていくためには、グループによる話し合い活動を取り入れていく方が有効であった。

〈課題〉

1年生と保育園児との関わりだけでなく、全学年や地域の方々等との交流につなげ、相手意識をもった表現の仕方を学ばせていく。絵本にはそれぞれ作者の伝えたい願いや思いがある。子どもたちはそれを十分に読み取っていたとはいえない場面も見られた。作者の願いや思いが分かってこそ良い「語り」ができる。今後は読み深める時間も十分に取っていく必要がある。

検証事例 4	「実験を踏まえての意見交流の指導」	10月～11月実施 小学校第4学年 理科
-----------	-------------------	-------------------------

1 単元名 「空気でっぼうの秘密を発表しよう」

2 単元の目標

- (1) 空気を入れた入れ物などを圧して手ごたえを感じたり、視覚的にも空気の存在を確かめたりして、空気の存在を理解する。 (関心・意欲・態度) (知識・理解)
- (2) 空気でっぼうを作って玉を飛ばし空気は押し縮めることができるかに問題を持ち、閉じこめた空気を圧して調べ、空気のかさと手ごたえの変化を関係づけて考えることができるようにする。 (科学的な思考) (技能・表現)
- (3) 水も押し縮めることができるかに問題を持ち、空気と比較しながら調べ、力を加えたときの空気と水の性質について考えることができるようにする。 (科学的な思考) (技能・表現)
- (4) 自分の考えを伝えたり、友達の意見を聞いたりする中で、相手にわかりやすく伝えたり、相手を理解しようとして聞く気持ちをも (社会性の基礎となる表現)

3 単元設定の理由

子どもが自らの経験を基にして対象に接し、予想や仮説をもって積極的に対象を観察しようとする態度は理科において大切なねらいの一つである。そして、自分の予想や仮説通りにならなかった場合は、自分の予想や仮説を子どもが主体的に見直し、再検討することで、子どもは自らの自然の見方や考え方を変容させていく。そこで、以下のような三点を学習の中に取り入れて展開していこうと考えた。

- ①これまでの経験ではぐくんできた見方や考え方を学習と結びつける導入をする
- ②学習を進める前に、まず自分の考えや予想を明らかにする
- ③子供たちの考えや予想を交流する

学習課題に対して自分の考えを発表し、友達と考え方のやりとりをする学習活動は、これまでの生活・学習経験が自分と異なる友達の考え方を尊重し、自分の考え方を再検討するというものとなり、こうした活動が「自分の表現力を高める」基礎になっていくだろうと考えた。

4 児童の実態

自然や社会事象などいろいろなことには、大変興味をもつ反面、面倒なことはやりたがらない傾向がある。自分に対して自信をもっている児童が多いにもかかわらず、全校集会などでの発表では声が小さかったり、下を向いて発表したりすることが多い。授業中においては、あまり人の話を聞かず、自分の言いたいことだけ発表する場面が多いので、いかに思考を深めていくか、ということが課題であり、2学期に入ってから話し合いの方法や手順といったものを授業の中で取り入れてきた。

5 単元の評価規準

- (1) 閉じこめた空気に力を加えたときのかさや押し返す力の変化を予想している。
- (2) 容器を使って空気に力を加えたときの現象に興味関心をもち、進んで空気のかさや押し返す力の変化を調べようとしている。
- (3) 空気や水のかさや押し返す力の変化によって起こる現象とそれぞれの性質を関係付けて考えようとしている。
- (4) 検証授業チェックポイント
 - ・相手の言葉を肯定的に受け止めて、そのよさを見付けている。
 - ・表現の工夫・表現のわかりやすさがある。
 - ・子ども同士のやりとり、コミュニケーションがある。

6 指導の実際（5時間扱い）

次	時	学習内容・学習活動	教師の支援・教材
1次 空気を とじこ めよう	1	◎身の回りで空気を閉じこめて使うものを発表する。 ◎ポリ袋やボール、プラスチックの入れ物などに空気を閉じこめて圧して、感触を確かめる。 ★自分の感触を発表する。 △フラスコの上のロートに水を入れ、ピンチコックを開ける実験を通して空気の存在に気付く。 (実験①) ★今までの経験などで自分の考え、予想を発表する。 ◎圧したときに中の空気はどうなっているか考え、発表する。 ★今までの経験などで自分の考え、予想を発表する。	○ポリ袋や空気を閉じこめやすい入れ物などを準備しておく。力の加え方を加減させる。 ○水の中に空気を出させて泡で空気の存在を確認させてもよい。 ☆実験で得た感触を自分の言葉で発表させ、友達の発表でよいところに気付く。 △時間があれば・・・教師の提示実験で見せるが、装置の説明と課題を理解させておく。 <準備>三角フラスコ、ゴム栓、ガラス管、ロート、ピンチコック ☆今までの経験や前時の学習を想起し、自分の考えや予想をわかりやすく自分のことばで工夫して発表し、交流させる。
	1	◎玉が遠くにとぶように、工夫して空気でっぼうを作り、玉をとばしてみる。 (実験②) ◎玉がよくとんだときの工夫やとんだときの様子について発表する。 ★自分の考えた工夫を発表し、友達の工	○材料などは各自の考えで自由に決めさせ、用意させる。 ○広い場所で活動させたり、目標物などをおいて意欲を高める。 ○玉のつめ方、押し棒の押し方、筒の中の様子などについて視点を向けさせ、活動させる。

		<p>夫や考えも聞く。</p> <p>◎筒の中の空気のかさが小さくなって、玉がとび出すことをまとめる</p> <p>— 本時 —</p>	<p>○押し棒が直接玉を押し出しているのではないことを抑える。</p> <p>☆玉を遠くにとばすための工夫などについて、自分の考えや経験をわかりやすく発表し、交流させる。友達の考えのよい所に気付く。</p>
2次	空気はおしちぢめられるのか	<p>◎前時までの学習から 空気は押し縮めることができるかに問題をもち、注射器に閉じこめた空気を圧して、かさと感じがどうなるか調べる。(実験③)</p> <p>1 ◎玉を水中にとばして、押し縮められた空気が前玉をとばしていることを確かめる。</p> <p>◎空気は、押し縮められてかさが小さくなるほど、押し返す力が大きくなること、この力で、空気でっぼうの前玉がとび出すことをまとめる。</p> <p>★自分の考え、予想を発表する。</p> <p>★気付いたこと分かったことを発表する。</p>	<p>○注射器から空気が漏れないようにふさぐ。</p> <p>○押し返される感触を意識させる。</p> <p>○水中では棒をゆっくり押し、水中で玉が出る様子をとらえさせる。</p> <p>○分かりにくい場合は、黒板に図示して説明する。</p> <p>☆今までの経験や前時の学習を想起し、自分の考えや予想を発表し、みんなに分かるように自分の言葉を工夫して交流させる。</p>
3次	水もおしちぢめられるのか	<p>◎水も、空気のように押しこめられると かさが小さくなるかに問題をもち、注射器に閉じこめた水を圧して、かさや押し返される感触がどうなるかを調べ、空気と比べる。(実験④)</p> <p>1 ◎空気と違って、水は押し縮められないことをまとめる。</p> <p>★自分の考えや予想を発表する。</p> <p>★気付いたこと分かったことを発表する。</p>	<p>○空気と違って押し縮められないことをとらえさせる。</p> <p>○注射器の中の空気を完全に抜いておく。</p> <p>○先が折れないように、押し方に注意させる。</p> <p>☆今までの経験や前時の学習を想起し、自分の考えや予想を発表し、みんなに分かるように自分の言葉を工夫して交流させる。</p>
		<p>◎学習の整理を行い、空気と水の性質の違いをまとめる。</p> <p>1 ★自分のまとめたことを発表する。</p>	<p>○空気や水の性質と関係づけて、自分の考えをまとめさせる。</p> <p>☆自分がまとめたことをわかりやすく発表させる。</p>

7 成果と課題

〈成果〉

本実践では、相手意識を取り入れた表現活動を次の3場面に設定して検証した。

- ①自分で作った空気でっぼうを説明する場面
 - ②自分の空気でっぼうで玉をとばしながら、遠くにとばすために班の友達と工夫しあう場面
 - ③玉を遠くにとばすためにはどんな工夫があったのかを発表する場面
- (1) 相手の言葉を肯定的に受け止め、よさを見つけたか。
- ① 友達がペットボトル、プラスチックの筒などで作った空気でっぼうの説明をする言葉の中から、自分も友達と同じように考えたところは「～さん、君と～を同じにしました。」と説明し、よく聞いている様子が見られた。
 - ② 友達のとばしている様子を観察する場面はあったが、自分の玉をとばすのに精一杯で、相手を意識しての言葉かけは少なくなってしまった。
 - ③ 玉をとばすための秘密、工夫を発表した内容は、自分のと比べよう・次の時間の参考にしようとしてよく発表を聞いていたことは評価できる。
- (2) 子供同士のやりとり、コミュニケーションがあったか。
- ① 持参した道具を利用して空気でっぼうを作るときに、友達の作業の様子を見たり、どうしようか、など話し合う様子も見られ、お互いに参考にし合っただけでよかった。また、玉がよく飛びそうな「空気でっぼう」の作り方等を聞いたりしていた。
 - ②・③ 自分の玉をとばすことに精一杯だったが、友達も失敗を繰り返しながらもとばそうと一生懸命に取り組んでいるところはよく見ていた。
- (3) 表現の工夫・表現の分かりやすさがあったか。
- ① 友達が作った空気でっぼうの説明では、友達と同じやり方のときには「～さん、君と～を同じにしました。」と、比較する友達の発言の例を挙げて分かりやすく簡単に説明しようとしていた。
 - ② 自分の考えたこと、思ったことを何人かは言えた。友達の発言に付け加えたり、別な言い方で感想を言おうとする子どもも見られた。

〈課題〉

- ・空気でっぼう作りにおいては、それぞれの子どもが持参した物で作ったものになり自分の考えをできるだけ具現化できたことはよかったがよく玉をとばしたグループとなかなかとばなかったグループができてしまった。このことが意見や感想の交流ができなかった大きな原因と考えられるので全体が共通した材料で、同じ条件で学習を進めていくこともこの検証には必要だったと考えられる。違った条件下でも自分の考えを主張したり、不十分だったところに気付いて発表できるようにするには日頃からの表現活動を高めていくことが課題である。
- ・子どもたちには理科の授業の進め方（予想、実験、まとめ）や話し合いの方法などを指導してきた。検証授業のチェックポイントの内容は、検証授業だけに当てはめるのではなく、検証授業までの指導計画の中で継続して実践、検証していくものである。また、普段からあらゆる授業の中で、そのチェックをしていくことが大切であり、その継続により「社会性の基礎となる表現力を高めていく」ことができるのである。

VI 研究の成果と今後の課題

本研究では、社会性の基礎となる表現力を育成するため、各教科等の授業実践を通して、様々な指導法の有効性を検証した。

ここでは、その結果明らかになった研究の成果と課題について「検証授業チェックポイント」の3つの視点から述べる。

1 研究の成果

○ 相手の言葉を肯定的に受け止め、よさを見つけていくこと

学習の中に意見交流の場を設定し、子どもたちが相手の言葉を肯定的に受け止めることができるような活動を工夫した結果、より積極的に相手とかかわって考えや立場を理解しよさを見つけていこうという態度が見られた。

また、少人数グループでの音声言語による表現活動を工夫することで、相手の表現を受け止めたり、自分を表現しようとしたりする意欲が高まり、互いを認め合う気持ちや自己肯定感を育てることができた。

○ 自分の表現を相手に分かりやすいように工夫していくこと

言葉を選んだり結論を先に言ったりする等、わかりやすい表現のための工夫について指導の改善を図った結果、子どもたちは自分の思いや考えを表現する際の相手意識をもつようになった。そして、相手意識をもつことが自分の表現や相手の表現への関心につながり、表現意欲を一層高めることができた。

○ 子ども同士のやりとり、コミュニケーションを取り入れていくこと

グループでの話し合いや学級全体での会議等の機会と場を設定し、一人一人の子どもの意見を全体に広げた話し合いを進めることで、子どもたち同士のやりとり、コミュニケーションを取り入れた活動を工夫した。その結果、一対一のやりとりにとどまらない、意見交流の広がり、深まりが見られ、公的な場での表現への関心・意欲を高めることができた。

2 今後の課題

本研究では、研究員全員が各教科等の授業の中で、子どもたちの社会性の基礎となる表現力を高めていくため、指導法の改善を図り、その有効性を検証した。

今後は、それらの指導法を活用して、各教科等における表現活動を一層充実させるとともに、教育課程に位置づけられた継続的・日常的な取り組みとして定着させ、子どもたちの表現力をより高めることが課題である。